



郡内随一といわれる大きさです（くまモンの高さは約50センチです）

歌碑 文化 寺社

# 南阿蘇って いいな

石橋 板碑

点在する文化財を訪ねて  
(随時掲載)

神体 伝統 歴史

### アツとおどろく大仏さん

春のやわらかい日差しが川面にゆらゆらと反射する中、川風に身をゆだねたネコヤナギがやさしく微笑みかけるようなある日、村内でも一番東に位置する両併地区を歩いてみました。きれいに整備された棚田が広がるその丘陵地の中腹にあたるところで、ひととき高い10本ほどのスギの木に囲まれたお堂が見えてきました。

道路わきには矢印と共に「阿弥陀坐像」と書かれた看板が設置されています。道案内をかってでたかのように、私の足元からヒョドリが「キーキー」と鳴き叫びながら飛び立ち、スギの小枝にとまったかと思うとその鳴き声は「こっちこっち」に聞こえてしまいました。お堂正面に数段の階段があり、その手前で一礼してあたりをみますと右手に立派な馬頭観音が、左手には二体の地藏菩薩が安置

されています。このうちの地藏菩薩一体は甲斐有雄さんという方が、約百年前に旅人の安全を願って私財を投じながら各地に1800基ほどの道しるべを設置されたことで、郷土の偉人と称されつつ彫りあげたものと、村文化財保護委員会名の説明標柱が立っています。さて、いよいよ拝殿へ入ってみましょう。入口はサッシ戸になっており、そこをスルスルと開けてみるときれいに掃除が行き届いた板の間が広がっています。地域の人たちが定期的に掃除をされているので、う。隅の方に整然と並べてある雑巾の数があることを物語っています。そのまま正面を仰ぎ見た途端、思わず「アツ、オオ」と感嘆の声が出てしまいました。そこには、高さが2メートルもあるような黒くて大きな木造の大仏さんが鎮座していました。

柔和なお顔に、丸くやさしい肩にかかった波打つ衣や、あぐらをかかれた膝などが、目の前にドーンと迫ってきます。阿弥陀如来といえは、遠い遠い西のかなたで極楽浄土を開いたとされています。また、両手の人差し指を丸くして中央で合わせた形をされていますね。これは阿弥陀さんの世界を表す九種類の印相のひとつで、上品上生といまして、これがひとつのアクセントになっています。村教育委員会からいただいた手元の資料には、作られたのが14世紀の南北朝時代ではないかと記されており、数字に苦手な私が必死に計算した結果、なんと最低でも620年は経っているということになります。気が遠くなるような時間が流れる中に、いったいどれだけの人々がこの前で願をかけたかと想像するだけでも気が遠くなりますよね。こうして仏教美術を肌で感じ往時に思いをはせながらの帰りしな、境内で75歳になられたという男性にお会いしました。なんでも高森町にお住まいで、週に2日ほどご夫妻で散歩を兼ねて訪れているそう。「ここに来るとなぜか心が落ち着き、雄大な景色も相まって心身ともに癒されます」と語ってくれました。阿弥陀堂を後にして家路を急いでいると、突然目の前に数匹のサルが現れました。悠然と余裕をかまして闊歩するその態度にある種の恐怖を感じましたが、農家や家庭菜園を楽しむ人にとっては、まさに脅威となっっていますね。去る者は追わず」とか言いますけど、サルが山奥に去ることを願ってその場を後にしました。

〔記事と写真〕  
熊本県文化財保護指導委員  
笠野 次雄